

おしゃべり通信

No. 224 H30.7.15 発行 如春会 浦田医院

～H29年4月発行 日本小児科医会会報特集～

スマホパンデミック！

＜スマホ社会の落とし穴＞

日本小児科医会 子供とメディア委員会 特別理事
NPO 子供とメディア 常任理事 清川輝基氏論文を基に

日本のお茶の間にTVが入ってきた昭和35年頃、時の総理大臣佐藤栄作氏は「一億総薄知」という、今では差別用語と言われる言葉を使って、TVが普及することで起きてくるだろう「人の頭の使い方」の変化に懸念を表わしています。

そのころにはまだ「マスメディア」という言葉も「電子媒体」という言葉もなく、ただただ、文字を読むことなく、TV画面から流れてくる情報や、その場で愉快なものに踊らされ、自分でじっくり考えることをしない人が増えてしまうことへの懸念を述べたのであろうと思われませんが、それから約60年たった現代の状況を見るに、故佐藤栄作氏はどういう感想を持たれるでしょうか？

実はこの当時、この言葉を受けて、NHKは「お母さんといっしょ！」という番組を作る際に、この番組の対象年齢の子供の集中力の研究をし、それが約3分程度であることを見つけ、番組構成をしました。大成功でした。また、この一連の研究の結果、この番組を見る子供の発語や表現力が上がるという結論が出、それが教育課程の中の「視聴覚教育」に繋がり、小中学校には視聴覚教室ができ、教室にTVが設置されたのです。

しかしそれは、教育の機会も義務教育しかなかった時代、情報の取得もラジオ・新聞しかなく、書籍も高級品で、単なる雑誌であっても本を足蹴にしたら、いや、跨いだけでもその足をこっぴどく叩かれ、そしてそれを誰も不思議と思わなかった未だ日本が経済的にも、そして「情報へのアクセス方法」も貧しかった時代のことなのです。

私たち誰もがその後の「メディア社会」の在り様の急激な変化を予測できなかったばかりか、UNICEFや日本学術会議等から、「日本の子供の現状について」の苦言が発表され始めた2000年代に入っても、何も修正できないまま現在に至っています。

これを踏まえて、平成29年4月、日本小児科医会報は以下のような特集を組みましたので、その要点をご紹介します。改めて皆さんも一緒に考えてみませんか？

尚、清川輝基氏は、元NHKディレクターで、今から40年前にもなる1978年に「警告！子供の体は触まれている」というNHK特集番組を制作された方です。氏はこの番組の中で「金魚走り」という言葉をつかい「身体の使い方が下手になっている子供がいる」ことを映像で示され、これが、当時「景気が良い」という言葉での日本人皆が好ましいと思っていたいくつかの社会現象（車社会の進展・冷暖房の普及・原っぱの消失等々）が如何に子供の生活状況を変えているか？そしてそのことが「子供の発育・発達」にどんな危険可能性をもたらしているか？について論じておられます。

これからしばらく清川氏の論文に添って以下の順にお話しを進めます。私の意見も入っていますし、言い換えもしていますので、原文がほしい方は、浦田医院受付までお申し出ください。

1. 現代文明の副作用？
 - 1) ネット社会がもたらしている現代社会の事象
 - 2) 子供の成育環境がどう変わったか？
 - 3) 「人間」になれない子供たち
2. 「劣化」の実相
3. 「劣化」をどう防ぐか？ (以下次号)

(平成29年7月 S.URATA MD.)

「子ども・若者とメディアを考える会」

期日：平成30年8月24日（金）19：00～

場所：玉名市民会館 会議室

内容：WHOが認定した子育てスキル

「トリプルP」についての話題

講師：福岡県立大学 看護学部

江上千代美教授

感染症 up to date! ~百日咳~

昭和30年頃まで乳児死亡を招く感染症の一つとして恐れられていた百日咳。「レブリーゼ」と呼ばれる息継ぎのできない激しい連続した咳が特徴で、ひいては低酸素脳症を起こし、痙攣をおこし、窒息し、心臓マヒを起こし、それはそれはつらい病気なのでした。

日本国内の百日咳発症は乳児期の所謂3種混合(百日咳・破傷風・ジフテリア)予防接種の定期化によって、この30年で1/10に減少し、「制圧された」と思われた時期もありました。しかし、乳幼児期の発症がほとんど見られなくなり、その副反応の方が強く問題視されるようになると、9歳前後に行われる所謂二期接種には百日咳抗原の入っていない二種混合(破傷風・ジフテリア)が採択されるようになりました。

其の頃 大人は「百日咳には罹らない、罹っても軽い」と考えられていたのです。近年、百日咳抗体が低い若年成人層に小流行が起きていますが、例えば一か月が長引くという訴えで来院されても「疲れるが命にかかわることは殆どなく、いつかは自然治癒する」ものであり、もちろん治療はしますが、そういう意味では、予防接種の目的であった乳児死亡予防としての3種混合の役割は十分果たしてきたと言えます。

ところが現在、この若年成人層での百日咳流行から、乳児期の3種混合未接種の乳児への感染が確認されるようになり、近現代的な新しい問題となっています。本年から、この百日咳も「届け出・全数把握・感染ルート確認・感染可能性者の隔離」等の方針で定められ、流行拡大阻止の対策が強化されました。

玉名市の3種混合ワクチンの接種率は概ね100%を達成していますが二種混合接種は90%前後です。また近々、二期接種にも「3種混合」が再導入されます。幼い時に予防接種を打った覚えのない保護者においても、この際お子さんと一緒にキャッチアップを考えるのが妥当な時代となったと理解しましょう。(H30年5月 SURATA MD)